

鳥語 58

2009

詩 評論 小説



鳥語社

鳥 58 語

2009年4月15日

目 次

詩

ヒマラヤを越えて

言 葉

さむい・夏の抄

三浦玲子 2

小 説

呼茲ここうじと芙蓉ふろうれい
(上)

東築史樹 6

疣いぼ 筆むし り

中尾哲也 28

蟠 桃

岩田孝子 58

エッセイ

ことを慈しむ

中尾哲也 20

真面目亭主とアバウト女房 — 木下蘭子 42

同人・会員住所録

編集後記

102 57

ヒマラヤを越えて — 鶴の旅 — 三浦玲子

犯しがたい

垂直の

空気の

絶縁体である

剛直な

天を貫通する

いっぽんの道しるべである

神業にもひとつの聞きなれた歌があるなら

伝説は生きつづけなければならない

深々と噴き上がり

けだもののごとく疾走する

ヒマラヤのジェット気流に乗って

見よ

鶴が渡ってゆく

その行く手を阻むものには従順な知恵で応え

風を切り裂く羽は

かくも冷静である

言葉

不意に何のためらいもなく

芥子の実のような喉の

ほそいみちすじから躍り出る

夕闇のなつかしい傾斜を

最初にゆるやかに舞い上がり

こみあげる吐息につまずきながらも

先へもつと その鋒先を正確に定めて

ぐつとからだごとにもり上がって

いつきに言葉が放射される

時に人の会話はつめたい感触で満ちるものだ

時に人の会話は互いをころし合うことで成り立つものだ

余分なものの取り払った言葉の解放は

静かな朝焼けの胸さわぎに似ている

私は目の前の言葉の圧力に平静でいられない

ナイフの先の言葉をころす

きえた言葉のあたり

十一月のよわいひかりが溜まっている

さむい・夏の抄

三浦玲子

今年の夏は

炎暑と書くには気がひけた

ハガキは余白の多いさむさむしさだ

見渡すかぎりの

鬱々たる曇天だ

定まらない

変に低調な

気温のはずれに

しゃがみこんだ夏がいる

草はらの似合う少年の

あついエネルギーはよく育った肢体から

虹のように放出されないまま

夏を置き忘れた

倦怠を

まぶしそくに眺めている

きつぱりと蹴り上げたサッカーボールが

走る夏空はない

降りこぼれる日差しを割って

花の主張もない

向日葵の黄色いオカッパの髪も

朝顔の変らない品性も

うすくらがりの葉群に咲く

木槿のはじらいも

夾竹桃の傲慢な繁殖も

白い桔梗のその身をわきまえた節度も

それぞれの色彩は

みな同じように

太陽に欺かれた地上に

むなしい影を落している

夏がさむいということとは

やがてくる秋を待ちのぞむ

こちよいい抒情を失うことだ

ひとはちよつと浮かない顔をあげ

それでも夏の盛りのコトバを一度や二度は吐いてみる

毎日暑いですね、お元気ですか

疣いぼ 耄むし り

中尾哲也

蔵の引戸に直足袋じくたぎほどの大きな南京錠がぶらさがっている。鋼鉄の鋸が薄間の中で鈍く光っている。

鍵をひねると、指に快いほどの小さな反発がある。その弾む力を押し返さずに、見えない鍵爪のあたりに意識を集中する。爪のはずれる小さな音がして、異様に大きい南京錠がかすかにふるえると、ツルの直径二十ミリの頑丈な緊縛が、あつけなく解ける。

母屋と棟つづきの蔵を、沢村の家では「中のくら」と呼んでいる。耀子ようこの実家の岡野の家では、同じような内蔵を「上のくら」と呼んでいた。呼び名の類似とともに、頑丈な引き戸や南京錠のかたちが、ふたつの家で申しあわせたように造りが似ている。

かみの蔵の一階は、京間の八畳どりで、畳が六畳、残り二畳分は板敷きになっていた。

そこに病気の長兄・一郎兵衛が幽閉されていた。

長兄が死んで畳は取り払われたが、鼻の奥に強く沁みて嗅覚のいじけるような異臭が、しぶとく残っていた。

なかの蔵の一階も、京間八畳の板敷きで、普段は使わない什器類や調度品などの、大小二十数個の木箱が、控えめな嵩で壁際に並んでいる。生き物の気配も、不快なおいもない。

夫の倅こい逸が、クロロピクリンの硝子容器を隅にかざしながら、母屋の廂の陰から陽ざしのまぶしい中庭へ出てきた。

別棟の粉倉へ行くのだろう。

舅は北の縁側で昼寝をしている。

先ほどの昼餉のさなかに、舅が、五分刻りの頭を前後に揺らしながら、だれに言うともなく、気になることを口にした。

子は、まだ出来んのか……。

舅の面差しは陳ねた少年を髣髴させる。額が極端に狭い。

耀子は、答えずに、前の席で茶づけをかきこんでいる悖逸の顔を上目遣いに見た。夫には、子を育てることに、不安を超えた恐れがあるのかもしれない。生みたくないという妻のひとことを、このひとは待っているのだろうか。生まないときまれば、幾許かの淋しさよりも、安らぎが勝るのではないか。

耀子は臉を閉じてなかの蔵の戸を引いた。

長兄・一郎兵衛は、かみの蔵の畳にうずくまり、腰に巻かれた鎖を両手でもてあそんでいた。その切れ長の目を、輝きのない眸を、左右対称の度合が際だつて精確な青白い瓜核顔を、耀子は思い描いている。

背筋をのびして、冷たいゆか板に素足を乗せる。

なかの蔵の二階は床面積が京間六畳の板敷きで、東の窓ぎわに籐の長椅子が一つ置いてある。古い蔵に不似合いな軽合金の本棚が、北の窓明かりを拾う形で並んでいた。舅や夫がきれいな好きなので、四列の棚に乱れはない。書物の

うえにも埃はなかった。耀子も掃除は苦にならない。週に一度は糠袋で床をみがく。

蔵には珍しく、北と東の二面が大きな窓になっていて、風がよく通る。

午前中の作業が終ると、窓明かりで本を読む。縫い物や編み物に熱中することもある。藤椅子で昼寝をするのも、毎日の楽しみだった。

樺の古木五本が、母屋の大屋根の端と、別棟の離れ座敷の屋根を覆うほどに枝を伸ばしている。枝葉が陽ざしをさえぎって、この休息所を涼しくしている。

樺の葉が、萌黄から濃い緑にかわっていた。

耀子は東の窓に寄った。両足を伸ばして尻を椅子に押しつける。冷たくて心地よい。

子供を持つことに、ためらいがあった。人なみに母親になつて、赤ん坊に乳房をあたえるのも、わるくないとは思うが、一向きに子供がほしいとは思わない。子育ての負荷はいとわれないけれども、破滅を、児と共有して、苦難に耐え抜くほどの強さは、持ち合わせていない。途轍もなく惨めな、おぞましいことにはならないと思いたい。しかし、皆無とも言い難い。

虫除けの網越しに東の低い山膚が近々と見える。稜線の南の裾は、県境の大きな山脈へ溶け込んでいる。視線を少し上げると、青緑色に濁った滴水の大きな溜池が見えた。

池の向こう岸に私鉄の支線が単線を通っていて、そのま
た向こうに耀子の生まれた村があった。

村の西のはずれには、耀子の生家・岡野の陋屋が傾いて
いる。松林の横で、大屋根が枯れた薺を乗せて、朽ちかけ
ていた。

耀子は窓枠に頸をつけて目を閉じた。

昨夜は、村の集會場で冷凍苺苗の説明会があると言つて
出かけた夫の帰りを待ちながら、遅くまで縫いものをして
いた。今朝は苺苗の仮植で早く起きたので、眠くて本を読
む気にならない。閉じた瞼のうらに、陽を受けて輝く青緑
の池と、崩れた大屋根の古瓦が消え残っている。

その家のかみの蔵で、馬乗りになつて下着に手を伸ばし
た長兄・一郎兵衛の暗い口の中を、耀子は忘れることが出
来ない。十三歳、中学二年生の夏休みだった。

一郎兵衛は、二十歳直前に発病して、九州の大学から連
れ戻された。それから数年間は、腰に鎖を巻かれて、脈
絡のない「言葉」らしい音で、唐突に人や「物」に、さら
に宙に向かつて「語りかける」。以外は、感情の有無も動き
も定かでない虚ろな表情で、奥の支柱につながれていた。

時折、母に替わつて食べものをほこぶ耀子とは、平静な
面持ちで向き合うことが多かった。話しかけると、これな
らば尋常ではないかと「疑いたくなるほど」の單語を呟い
て、笑顔を見せた。わが妹には、正常な認識を維持してい

るのかもしれないという、おとなたちの樂觀と油断が、災
いを招いた。耀子は一郎兵衛が手繰り寄せた鎖で両手の自
由を奪われて、畳に押し倒された。困惑と恐怖で、声が出
なかった。抵抗もできなかった。

あれから十二年だが、ふとももを割つて差し込まれた固
い膝頭、何本かの蠋く太い指が虫のようなもの、目の前に
転がつていた籐の弁当箱、腰から下の濡れた感触と突然の
思いがけない疼痛……皮膚に吸い付いているような忌まわ
しい感覚の記憶を、耀子は拭い去ることができない。

網を支えるアルミの枠にひたいを押しつけて、耀子は太
い息を吐いた。眠りにひきこまれそうになるが、眼のはし
に緑の残像があつて気になる。樺の葉さきの緑ではない。
若草色の小さなものが蜚集している。晴天の青に、あざや
かな若草色の残像が重なっている。枠にひたいを押しつけ
たまま、頸を胸にひきつけて、瞼を大きくひらいた。

窓枠をつたつて顔の間近へ這い寄る小さな生きものが見
える。戸袋にはりついた落花生の殻のような灰色の果から
体長一糎にも満たないカマキリの子が湧き出ている。おび
たらしいとは、このことか。戸袋も外壁も、蜚集の文字の
意そのままに、蜚の毛さながらの、毛足の長い若草色の絨
毯に被われて蠢いているかのようだ。

視界を遮つてしまうほどの、この虫の数は、千か、万か、
数十万……見当もつかない。どこかに、落花生の殻に似た

拇指大のあの果が、幾つかあるのだろう。

闘争本能の頭れか、ひ弱な翅には不釣合の大きな鎌を振りあげてからだをのけ反らせると、回転しながら、若草色の絨毯のなかへ紛れ込む。

仲間に蹴落とされて、防虫網に足の先をひっかけたまま、薄い網の翹で空しく羽ばたく奴もいる。落ちこぼれて稚い飛行を試みるのもあるが、風に運ばれて視界から消える。

西の空に、墨と灰の、斑模様雲がひろがっていた。

真うえから東へかけて、青空で陽しさが強い。西山のむこうで、遠く低く稲妻が走り、雷鳴がとどろく。どこかでにわか雨が降っているのだろう。頭のうえを風が東へ吹いていた。

強い陽射しをまともにうけた憚逸が、畝をはさんで耀子と向かいあい、汗で光った眉間に深い皺を寄せて、苺苗を植えている。耀子も中腰の姿勢で、夫の動きに従って苗を植えながら北へ動く。畝巾が広いので、カマボコ型の頂上まで腕をのばして植えるときは、腰と腹と太ももに体重を均等にかけようとして、及び腰の不安定な姿勢になる。畝のうえに片手や片肘をついての作業は、土がこぼれ落ちて溝がふさがり、畝のかたちが崩れるので、避けねばならぬ。ひたいの汗が目にはいる。汗で濡れた背中を風がなで

ると、ひやりとして心地よい。

耀子は昼食の支度で、先に母屋へ帰る。北の畦まであと二十メートルほど植えて、折り返し、南の畦まで一畝だけ植えると、今年の仮植は全部終る。

舅は南の高畦に腰掛けて、刻み煙草を吸っている。

促成いちごは、裏作の麦類が商品価値を失いはじめた頃から、現金を得る最も手近で有利な作物として、この地方で次第に盛んになってきた裏作だが、複雑で多様な作業は、熟れた苺の華麗な赤と豊醇なつぶつぷの印象や「イチゴ狩り」という遊びから推して想像されるようなのかなものではない。

どの農作物も同じだが、良い結実を得るためには、苗床にあるときから収穫まで、常に無駄な蔓の繁茂を抑え除草をくりかえし、病虫害への配慮を片時も怠ってはならない。促成いちごは、変形・畸形の少ない粒のそろった実を得るために、ビニールハウスの中に蜜蜂を放って雄花雌花の均等な交配をたすけるという方法を試みることもある。そのあたりなら、耀子にもさしたる違和感もなぐうなずけるのだが、さらに、ビニールハウスの中に白熱電灯を点し、日照時間の錯覚を苺に強いて、成長を早める、などという試みには、自然の営みへの抗いが、あまりにもあからさまで醜態に過ぎるのではないかという戸惑いを覚える。

収穫の最盛期になると、早朝から腰をかがめて摘みとつ

た傷みややすい実を、納屋に持ちかえり、そこで大粒、小粒、変形など幾通りもの階級に選別して、出荷用のケースに詰める。

全体の作業が複雑で多岐にわたり、労働時間が並外れて長い。翌日の払曉まぎわの入浴中に居ねむりをして溺れそうになった若い嫁の話や、足が重くなり、意識がすすんで畳に落ちてゐる数枚の新聞紙や紙袋につまずいて倒れた若い母親の噂などが、まことしやかにささやかれたりする。

苺の収穫最盛期にかぎらず、繁忙期になると、惇逸がためらわずに伊勢志摩・安栗岬の海女さんや能登半島羽咋の農家の女手を順次に雇うので、耀子は、紙袋につまずいて倒れるほどに疲れることはなかった。

土に手を触れ、青いものを育てるのは心地よい。早朝から田に出て働けば疲れはするが、不快な疲労感とは皆無だ。

苺収穫の最盛期が過ぎ、稲田の緑が濃くなる頃から、沢村の家では、束の空が白みはじめる時刻に田に出て、正午までに田の仕事を終る。あとはそれぞれに好みの作業や遊びをすることになっている。

舅が南の高畦で腰をのばして立ちあがり、さきに帰って風呂に湯を張っておくと言った。惇逸が眼を細くして耀子を見た。汗で光る顔がほころんで、白い歯が陽を受けて輝

いた。耀子もほほえみ返しながら、きのうのカマキリの子をふと思つた。この人は、子供を持つか持たぬかということでは、はっきりしたことを言わない。その話になると、顔を曇らせる。

惇逸はつねに勤勉で、農事についての研究心も旺盛だ。村の中でのつきあいにも、他人のそしりを受けるような欠けたところはなかった。浪費家ではなく、悪い遊びをしたことがない。といつて、吝嗇というのでもない。

いまの暮らしにそぐわない、敵めしいばかりの純和式の家屋や、過剰に凝つた前庭・中庭の保全にも常に努力を怠らない。朽ちるまえに少しずつ手を加えて改修し、一応の対面を保っている。

なにことに、無頓着ではない惇逸が、子を成すか否かということになると、口を閉ざす。子供はいらないと、あからさまに言われれば、反撥が同調か、とつかかりがでるのだが、それができないのは、もどかしく、いらだたしい。恐ろしくもあった。

そういう夫に真正面から立ち向かうことをためらわせる、うそ寒いものに、耀子はうしろろ顔を掴まれている。あのかみの蔵での、長兄・一郎兵衛の膝頭、何本かのうごめく太い虫のようなもの、腰のあたりの濡れた感触と疼痛……を思いおこすと、夫の思ひの壁に執拗に食い下がるが、このできないいいじけたものが、しぶとく生きている。そい

つは、たかぶり逸ろうとする思いを萎えさせる。夫婦になつて、今年の秋で三年だが、あのおぞましいできことを、ふたりの日々の睦み合いのうちに溶かしてしまふことのできない、夫婦としての脆弱なくらしを、耀子ははがゆいと思う。

昼までの作業が終つて、三人で遅い昼ごはんのあとの茶をのんでいると、いまだきの百姓、がさがさとせせこましいばかりで、じつきに一年たつてまいよる、昔の百姓、のんびりしとつたでえ、一年、長かつたのお……という舅の口ぐせがはじまつた。

耀子はうつろにうなずいてゐる。

耀子は、きのうのカマキリの子を思い出していた。若草色の薄い網の翅をひろげて、それぞれに夏草の中へ散つて行つたのだらう。今日もあの巢をのぞいてみよう。小生意気な力マ振りのかつこうはおもしろい。

二十年まえに大きな戦争に負けて、おおむねは外国人の意志で、一挙に思いきつた農地改革が行なわれたということだが、舅の言うのどかな昔とは、たぶんそれ以前の話だろう。それまで、沢村の家は、この盆地では屈指の地主で、四十数町歩の田畑を所有していた。隣町まで他人の土地を踏まずに歩いて行けるほどだったという。

沢村の家と濃い血のつながりがあるという耀子の実家・岡野の家も、三十町歩を越える田や畑をもつていた。

青緑色に濁つた溜池を中にして、ふたつの家の田や畑が四方にひろがつていたことになる。

正確なことはわからないが、ふたつの家は江戸時代も初期の昔から、池東様、池西様と呼ばれて、反目しあうこともなく、それぞれに十数人の作男や下男下女を使い、その労働力を互いに融通し合いながら、また、周囲の百何十軒かの小作農家から小作料を搾り取り、そのうえ彼等に小金を貸して利息をとりたて、返済不能の者からは、なけなしの自作田畑を取りあげて肥え太つたのだという。

池東も池西も、小さな王国に君臨しているかのような、せせこましくいじましい幻想を、生きるよすがにしていたのではないのか——そう思ったが、耀子は黙つていた。

舅はうまそうに茶をすすつて話しつつける

池東と池西は、よそ者はいりこんで血筋が下司になるのを恐れて、さらに資産の散逸を嫌つたのか、かなり古くから頻繁に婚姻の往き来をくりかえして、由緒ある家系、つまり、佳き血統を守つてきた、などと、気楽なことを言つて、舅はひとりうなずいてゐる。

指を折つて数える仕種をしながら、何代まえの沢村の長女が、県境に近い山奥の大庄屋へ嫁入りし、その息子が岡野の家に婿養子にきて、その末娘がまた沢村の家に嫁にき

て……はてしなくつづく奇妙にも誇らしげな舅の説明は、いくら聞かされても、なにがどうなっているのか耀子にはわからなかった。老耄の兆しかもしれない舅の果てしないつぶやきはじまると、惇逸は顔を曇らせて席を立つ。

沢村と岡野の両家は、なぜそれほどまでに血縁による婚姻をくりかえしてきたのだろうか。ふたつの家では、遠い昔になにかいまわしい出来事があったのかもしれない。一郎が子供を持つか持たぬかという話になるときまつて見せる不可解な白々しい表情は、そのあたりに源があるのではないか。耀子は、あの、かみの蔵での、ケダモノの膝頭、何本かのうごめく太い指か虫のようなもの、腰のあたりの濡れた感触と疼痛……を思いおこしながら、ためらいの原因は遺伝のことではなにか気がかりなことでもあるのですかとたずねてみたことがあった。惇逸は、おだやかに澄んだ眼を宙に向けて、さりげなく、なにもためらつてなどないと言つと、すぐに話をほかに移そうとした。

ためらつていないのなら、生まないときめているのですかと詰め寄りたい腹立ちの言葉を、耀子は胸の底に押ししずめて、夫の空々しい横顔におびえながら、ひとりであれこれと思いをめぐらせるばかりだった。

沢村の家も岡野の家も、なにことが、おぞましいものをつたわる家系として、まわりの人たちから縁組みを拒まれつづけてきたのかもしれない。しかし、そうした記録は、

なかの蔵の本棚のどこにもないし、村人たちの噂にのぼつたということも耀子は聞いていない。

耀子の実家のかみの蔵にも記録はなにもなかった。だが、なにことが過去にあったとしても、周倒な先祖の人たちが、災いのもとになりそうなる記録を、あえて後世に残すはずがないし、村人たちの噂にしても、あからさまにはされなかつただけのことで、暗いささやきは、ふたつの家の者の知らないところでひそかに交わされつづけてきたのかもしれない。

沢村と岡野の先祖の人たちは、三百数十年ものあいだ、あの大きな溜池の青緑色の水のように濃い一条の血の流れをたどつて交わりつづけ、いかなる思いを秘めつつ生き継いできたのだろうか。

いつ終るかもしれない舅の話聞きながら、耀子は湯のみ茶碗を両手で包んで眼を閉じた。その間の一角から惇逸の明るく輝くふたつの眸がこちらを凝視していた。あわれむような、いたわるような、やわらかいひかりをたたえた男の眼の色が、耀子にはいらだたしかつた。そして、暗闇の別の一角には、かみの蔵の汚れた畳に耀子の細いからだをねじ倒して下着を剥ぎとつた一郎兵衛の、青白い瓜核顔と空しく澄んだ茶色の眼があつた。そこに、薄い網の翅を持つ若草色のカマキリの子が蛸集して、蠢いている。

耀子は不意に立ちあがつて、夢から抜け出るような不安

定な足どりで食堂の外へ逃げた。

秋の農繁期が終つて、この数日は膚寒い曇り日が多い。野の風景が秋から冬へ移る。

沢村の家では四日前に苳苗の定植が終り、骨組みの上に新しいビニールを掛ける作業も、きのうの夕方までにすべて終つたので、耀子は少しばかりのんびりした気分、田のところで盛りにあげたまま捨て置かれていた籾殻の山に火をかけてまわつた。正午近い時刻なのに、一面に敷き詰められた切り藁に霜が消え残っている。長靴で踏み歩くと、さくさくと心地よい音がした。村のまわりの田で籾殻を焼く白い煙が幾筋も初冬の薄墨の空にたちのぼって、香ばしいかおりが漂っている。

溜池の向こうの池東村の上空にも、白い煙の柱が立ちならんでいた。耀子は焰に両手をかざしてしゃがみこんだ。

池東の岡野の家の表庭で、惇逸とふたりで龍吐水や古めかしい火事装束、虫喰いのひどい簞笥や長持などを燃やした真冬の朝の、焰の朱赤と、ケダモノくさい煙のにおいを、耀子は忘れることができない。

脳内出血で死んだ父親の四十九日の法要が営まれた日の早朝だった。激しく燃えあがる焰の向こうで上気してつやつやと赤黒かった惇逸の頬の色が、いまままだ耀子の記憶

に鮮やかに残っている。すべての家族と死別して、まったくのひとりきりで、廃屋さながらの、だたっぴろい岡野の家で寝起きしていた耀子の眼には、惇逸の大きなからだに陽やけた顔が、殊のほか好もしく、たのもしくうつった。

耀子は物心ついてから十数年のあいだに、六人の家族の死の顔を見ている。清治郎という名の次兄は、生後一年も経ずに病死したという。

はじめて見たのは、肺結核で死んだ姉の薄化粧をされた三角形の顔だった。長兄・一郎兵衛と双児だったというこの姉の死の顔は、耀子が五歳になったばかりの、幼い眼で見えたもので、人の終りに接したという自覚はなかった。十五歳で死んだ娘の遺体のうえにかわるがわるおおかぶさつてからだをふるわせていた祖父母と両親の悲嘆のありさまを、よそごとのように眺めていた。

それから三年のあいだに、祖父と祖母が死んだ。このふたつの死も、硬い皮膚の、動きのない顔が、菊の華の中に沈んでいるのを見て背筋が寒くなり、母親のうしろでおびえていた、ただそれだけのできごとだった。

祖母が死んだ翌年の秋に、母親が三十九歳で消えた。それは、母親が突然に消え去ったとしか言いようのないできごとだった。その死因は、なぜか耀子には曖昧にしか知ら

されなかった。おまえの母親は肺結核の姉の死、祖父父母の死と、果てしない看病の生活に疲れて病んだのだという父親の言葉をそのまま受けとって、まだ十歳になったばかりの耀子は、母親を呼んで泣いた。だが、いまの耀子は、看護疲れで倒れることはあつても、その過労が突然の死に結びつくというのは、納得しがたいことだと思つてゐる。あの母親は自死したのではなかったのか。近くの町で開業している血縁の医師を中心に、涙を拭いてやれ、襟を深くあわせて喉をかくせと、ひそかにささやきかわしていた父親と沢村の男ふたりの声を、となりの部屋から襖越しに聞いているのを耀子はおぼえている。その記憶をもとに、母親は首を括つて死んだのではないかという考えは、正鵠を射ているのではなからうか。

母親が死ぬ一年ほどまえに、沢村の家でも、悖逸の姉と弟が同時に満水の溜池に落ちて死んでいるし、その半年ほどあとに、彼等の母親が無番の踏切を自転車を押して渡つていて、貨物列車に碾かれ、事故が故意か判然としない死にかたをしている。

この三人の身近な人たちの突然の死と舅や姑の死、わが子らの病苦や死、殊に長男・一郎兵衛の無残な姿などに幾重にもとり囲まれた母親の頭の中では、幸も不幸も他人の目も耳も過去も未来も、生も死も、いっさいのものが搗き混ぜられて渦巻き、その渾沌の果てにおのれを見失つてし

まつたのではないだろうか。

また、長兄・一郎兵衛の病名についても、耀子はいまもまだ正確なことを知らない。病気のにいさん——という呼びかただけが幼い頃からの記憶にあるばかりだ。かみの蔵でのあの忌まわしいできごとのおとでさえ、父親はごく短く、なにもわからん奴や、こらえてやつてくれと言つただけで、病名についてはひとことも話さなかった。

その兄が、かみの蔵の引き戸の溝に暗褐色の血のかたまりを吐いて死んだのは、耀子が十六歳の真冬だった。それから五年あとに父親が死んだ。兄は二十六歳、父親は六十三歳だった。

父親が耀子に残してくれたのは、倒壊寸前にまで荒れた家屋と、二反歩の田が三枚と、ほかには古い家具、衣類、そして表門の天井にぶらさがつてゐる火事装束、横腹に龍吐水と彫つてある木製の消火ポンプが一台、などで、ほとんど使いものにならないものばかりだった。農地改革で三十数町歩の田畑を失つたといつても、自作してゐたうちの町六反歩だけは残つていたはずだが、その後二十数年間の喘ぎながらの生活のうちに、田畑はもちろんのこと、めばしい調度品から衣類にいたるまで、売り食いしてしまつたのだらう。

葬儀のことは沢村の男ふたりがいつさいをとりしきつてくれた。近くの身寄りには彼等だけだった。遠くにいる血縁は馳の道を断つたように疎遠になつていた。

初七日の法要がすんで村の老人たちが帰つたあとの、夜更けの仏間で、三人は夜食を食べた。耀子は破れた襦や落ちてきそうな天井を眺めて、おそろしいような寂しさにおそわれた。惇逸が、はにかむような笑顔で、池西にきていっしょにくらしたらどうやと言つた。そのときの耀子は、惇逸にかぎらず、だれの好意にも甘えなくなかつた。なぜと自分に問うても明確な理由はなにもない、幼い意地の突張りで、脆く崩れてしまふ強がりにはちがひなかつたが、そのときの耀子の思ひは、首を横にふるよりほかに、自分にはすることがないというふうな、みじめだが、せいじつぱいに張りつめた強情なもので満ちていた。惇逸は眉間の皺を深くしたが、すぐに笑顔にもどつた。遠慮はいらないよ、その氣になつたらいつでも池西へ来てくれ、あんたのお父さんからもかねがねそう言われていたんや……と、つぶやくように言つた。耀子はだまつて雨漏りのあとがさざ波のような模様になつてゐる長押（ながおし）を見ていた。

どこからも嫁にきてくれる人がいないものだから、手近な娘を取りこもうという魂胆が、というような、荒んだ思ひが耀子にはあつた。

惇逸の澄んだ眸からのがれるように、耀子はそつぽを向

いたまま冷たい酒を飲んだ。耀子にとつて惇逸は身近にいるやさしくて好もしいただひとりの男性だった。こんな恐ろしいような化け物屋敷にいる女を嫁にもらつてくれるのは、惇逸だけかもしれない。世間の人たちは、なにかを恐れて、だれも相手にしてくれないだろう。

惇逸とは、幼い頃から互いによく往き來して、いじめられたりかばつてもらつたりした、兄妹のように親しい間柄だった。惇逸となら、もつとも平安な暮らしが得られるのではないか。

惇逸のやさしげな眸の奥に、一郎兵衛の手のひらの感触が、つぶつぶの発疹の形を借りて仮象（かしょう）の像を結んでいる。そいつは吐き氣を催すほどにおぞましい。その苦痛の奥に、むず痒く、くすぐつたく、身の置き所のないほどの、五体の振れるような哀しみを伴う不快感がある。

耀子は、夜のかみの蔵を思つてからだをすくめた。

分厚い引戸にぶら下がつてゐる大きな南京錠の、薄闇の中で鈍く光る鋼鉄の錠と、鍵を軽くひねつて金属の爪がはずれるときの指に心地よい撥（は）條（じょう）の振動。

青白い瓜実顔の一郎兵衛の目が、こちらを凝視してゐる。

耀子は父親が死ぬ一年まえに近くの街の女子大学を卒業して、その町はずれにある種苗農場で事務員として働いて

いた。そこでの給与は、暮らして行くには足りなかったが、耀子名義の預金が少しあったので、すぐに生活に破綻をきたすということはなかった。それでも耀子は、沢村の男たちには相談せずに、二反歩の田を一枚だけ捨て値で近くの農家に売ってしまった。家も屋敷も売れたかっただが、それには買手がつかなかった。

二百数十万円の金を手になると、耀子は毎夜のように大都会の繁華街に出て、映画を見たり、めずらしいものを食べたり、高価な洋服や装飾品、レコードなどを買ったりして遊びまわった。短い旅行もしてみた。遊んでいても楽しくはなかったが、勤めが終って、まっすぐに、だれもいない化け物屋敷へ帰る気にはなれなかった。

南行きの最終電車が走り去ったあとの、森閑とした駅舎の裏に出て、線路に沿ったアスファルトの道を松林の下にある化け物屋敷に向かって歩きながら、沢村の家の明るい部屋を思い描いた。暗闇ばかりの耀子の周囲で、かすかに明るのは沢村の家だけだった。耀子は知っている限りの歌を、大声でうたった。十分も歩いて溜池の堤防の上に出ると、夜の水が黒くたいらにひろがっていた。この水の底には沢村と岡野の血が溶け合って固まった、何十個か何百個かの球状のものが沈んでいて、転がったりぶつかったりしているのかもしれない。暗い水の下には華やいだ賑やかなものがかくれているようで、なつかしくさえあった。

池の向こうに遠く、沢村の大屋根が闇の底に横たわっていた。その下の、一点の暖かな灯りから耀子を遠ざけようとするかのように、北行きの最終電車がからっぽの車内を明るく見せて走り去った。

周りのどこを眺めてみても、自分が最もひどい目にあっているのではないか。そう甘えて考えると、くやしくて、やみくもに腹がたった。

化け物屋敷に帰ると、すべての部屋を明るくして、中央の客間で寝た。眠るのはたいいてい明け方に近かったが、それでも朝は遅刻せずに勤めに出た。

夜になると、繁華街をさまよった。

そんな生活が二ヵ月もつづいただろうか。田を売った金は半分に減ったが、心細くはなかった。金がなくなれば、残りの田を売って、父親の四十九日の法要をすませるとすぐに大阪へ出て仕事をさがし、アパートでも借りようと思っていた。

四十九日まで三日を残すだけとなった夜更け、いつものように大声で流行歌や童謡をうたいながら黒い道を歩いていると、自転車を押してつけてくるものがあった。ふり向くと、月あかりの中で背中を丸めた大きな黒い人影が立ち止まった。耀子にはそれが惺惺だとすぐわかったが、声をかけずに背を向けて歩きつづけて、溜池の堤防に上がったところまでふり返った。

惇逸は素早く近寄ってきて、耀子の行手をさえぎるように自転車を立てた。護衛はいりませんから、と言う耀子にはとりあわず、一郎は煙草に火をつけた。その明りの中に浮かびあがった男のひたいが、かみの蔭で死んだ一郎兵衛の生え際の形に酷似していた。

耀子は息をのんだ。

あの、ケダモノの膝頭、何本かのうごめく太い虫のようなもの、腰のあたりの濡れた感触と疼痛……が、下腹のあたりによみがえって、手の指先まで熱くなるのを感じながら、耀子は黒いアスファルトの道を走った。惇逸は池の水にひびく大声で、まだ遊び足らんのか、と言っただけで、追ってはこなかった。

次の日も、耀子は夜ふけに暗い道を歩いた。惇逸は今夜もきつとくるだろうと思つて、歌もうたわずにいつもより足早に歩いたが、惇逸の姿はどこにもなかった。裏切られたような淋しさを噛みしめながら化け物屋敷まで帰つてくると、惇逸が門の脇に自転車を立てて煙草を吸っていた。その大きな背中を見たとき、耀子の胸には腹立たしいのに奇妙になつかしい、不安定な感情が湧き起こって、甘酸っぱいものが胸に満ちた。

声をかけずに門の中へはいろうとする耀子の肩を、大きな手で掴んで引きもどした惇逸が、夜中まで遊び歩いて、なに気どつとるんや、と低い声で叱りつけた。男の強い力

からのがれようとする耀子の頬で平手が鳴った。子供みたいな甘えたこと、いつまでつづけたら気がすむんか、もっと素直になれ。

惇逸はいま頬を打った手で耀子の頭を上から包むようにおさえつけた。男のざらざらした手のひらの感触が髪をとおして頭の皮膚につたわってくるような気がした。その感触は、ひりひりと好もしく、そしておそろしくもあった。

こみあげる鳴咽をこらえて、耀子は惇逸の大きな眼を睨みつけた。門灯のうすあかりを受けて輝く男の眸の色は、かみの蔭の畳にうずくまって宙を見ていた長兄・一郎兵衛の眼の輝きと同じものだった。あのおそろしいケダモノさえもなつかしいと思うほどに耀子は淋しかった。涙が頬をつたつて頸から胸に落ちた。池西に来てしばらく暮らしてみいや、あとのことは、気持ち、落着いてから、ゆつくり考えたらええやんか、すねたようなことしてんのは、耀子ちゃんらしいで……。さとするように言う惇逸の声が、耀子の胸に沁みた。

四十九日の法要はその年も暮れに近い二十三日に営まれた。空が突き抜けたように晴れた日で、手足の先が痛いほどつめたかったのを、耀子ははつきりおぼえている。

沢村の男ふたりが朝から手伝いに来てくれることになっていた。耀子は勤めを休んで早起きし、仏間や客間の掃除をすませて、表庭に箒の筋目を入れながら惇逸を待った。

ときどき門の外に出て、松林のあいだから溜池の堤防を見た。堤防の向こうに池西村の家並みが屋根の上に霜をのせて、陽をはね返していた。

まず惇逸だけがやってきた。惇逸は自転車をもの中へ押し入れながら、白い息を吐いて、寒いなあと言った。父親よりもひと足さきに来てくれた惇逸の気持ちがいれしかつた。ジャンパーの、ふさふさした白い毛皮の襟を立てて、その上に派手な色柄のマフラーを巻きつけた惇逸の姿は、まるで大きな子供だった。耀子は、父親の死後はじめて一郎に笑顔を向けた。

年内いっぱいでは種苗農場をやめることにしました、とはずんだ声で告げる耀子に、惇逸は、一度うなずくと、陽やけた顔を上気させながら、あいつ、燃やしてもええやろと言つて、表門の天井を見あげた。そこには、くもの巣にまみれた火事装束と龍吐水がぶらさがつていた。蔵のなかの長持、衣装箆、道具箱も、ぜんぶ燃やすよ……。惇逸がいたずらつ子のような顔で言つた。

表庭のまん中に「いやらしいもの」を積みあげて火をつけると、焰はすぐに大きくなった。ケモノくさい煙が、崩れた瓦葺きの大屋根を、霧が流れるように這つて、晴れわたった冬空にたちのぼつた。黄に近い朱色の焰の向こうで惇逸の笑顔が揺れていた。暢気なおやじが来たら、先祖様が残してくれたもんを焚いてしまいやがったと、目えむい

て怒るやろな。惇逸は楽しそうに笑つた。その太い笑い声をききながら、耀子は唇を固く結んでいた。

長いあいだ腹の底にあつてわずらわしかった脂肪状の頑固な疲労のかたまりが、とろとろと溶けていくような快いぬくもりに全身をつつまれながら、耀子はいつまでもこうしていたいと思つた。それは、惇逸との結婚ということをも思つての幸福感だった。惇逸もそれをのぞんでいるのにちがひなかった。池西と池東で、しぶとく婚姻の行き来をくり返して、どれほどに両家の血を濃くしたのかわからないが、いまのふたりの「血」は、法で婚姻を拒まれるほどに近くはない。惇逸とあのケダモノをつなぐ血の流れをたどると、そこにはかなりのへだたりがあるはずだ。

一九六六年三月上旬、午前五時の東の空に、光はまだ無い。耀子は、作業棟の窓際、星光色蛍光灯の明かりの下で選別済みの苺を紙箱に詰めている。それにしても、と耀子は思う。今時の世間並みよりもかなり濃い血縁の婚姻を、執拗に繰り返していれば、濃んだ資質の核に、醜い歪みや疵、毫り（こり）とれない異物が芽生えるのは避けがたいだろう。たかがしれた池東・池西の家系ごときを、純血の佳き連綿などとは、厚顔に過ぎて口にするのも恥ずかしい。

とはいふものの、未練と蔑まれるだろうが、歪みや疵、

醜い突起などの好ましからざる情報の隙間に、たとえわずかでも「優れた資質の核のようなもの」が、長い歳月のうちに、ひそかに芽生えて生き残っているかもしれない。

去年の夏に見たあのおびただしい若草色の幼いカマキリのなかで、仲間の死屍を踏んで生き残り、いじけたためら

いなど見向きもせず、カマをふるって弱い虫に襲いかかる猛々しい捕食者になったのは、どれほどの数だろうか。あのケダモノ、長兄・一郎兵衛の固い膝頭、数本のうごめく太い指か虫のようなもの、腰のあたりの、濡れた感触と疼痛……が、罎子にまとわりついて、離れない。(了)

鳥語 次号 五十九号の原稿を

九月十五日までに

鳥語発行所へ送ってください

鳥語 五十八号の合評会を

六月十五日までに開催します

詳しくは後日連絡します



鳥語社

真面目亭主とアバウト女房

木下 蘭子

真面目亭主とアバウト女房

百子、六十九歳。いたって平凡な主婦である。子ども三人、孫四人、皆元気だ。

百子の夫、太郎、七十三歳。会社人間を卒業して八年。元氣ではあるが、自分の健康に対して大層注意深く、毎日のようにどこかの病院へ行っている。心臓にステントを入れたこと、糖尿病予備軍であること、そして腰痛、耳鳴りと不快愁訴は多い。致命的に悪い所はないものの、不安材料に事欠かないので、始終どこかの病院へ行くことになるのだ。健康を管理するための最大の努力を怠らない。

太郎の朝はラジオ体操から始まる。六時半、ラジオの掛け声に乗って姿勢を正し、大きく手を振って几帳面に体操をする。夏はいい。寒くなると難儀である。なにしろ日本の一軒家は隙間風で何とも寒いのだ。それで、太郎はラジオ放送を録音した。朝食後、自室で、録音に合わせ几帳面

にやっている。必ずやる、それが彼のモットーである。

食後の散歩もそうだ。糖尿の予防には何より食後の運動がいい、と医者に勧められてからは、きっちり歩く。夕食後も歩く。時間は夜の十時前後だ。かくして太郎は医者から見て模範的な患者なのだそうだ。

薬もきっちり飲む。うっかり飲み損ねた時の悔やみよりは悲しいほどで、

「死ぬことないって」と百子がうっかり言うものなら怖い顔で睨みつける。病気への不安感より、物事をきっちりやれなかったことへの落胆が大きいのだろう。

朝のトイレも判で押したようにきっちり行う。新聞を持ち込んで、三十分は座っている。トイレで夫がいきりまわした新聞を後で読む百子はなんだか気分が悪い。几帳面なわりには紙面がずれていて、全体にこわごわしているのだ。古新聞を読んでいるようでいやなのだ。

今朝も百子が出掛けようとしたら、いつものことだけれど、小うるさく言い続ける。

「運転には気をつける。信号は黄色で停まれた。スピードを出し過ぎるなよ。車線変更が一番事故の元だ。ハンドルで逃げない。ブレーキだ。とにかくゆっくり走ることだ」

「ハイハイ、分かっています。（うるさいなあ）」

「分かっていると云うのが問題なんだよ」

「行つてきます。（ああ、うるさい。事故を起こして欲しいのかしらね）」

百子はハンドルを握りながら、世の中にはマフィアの法則というものがあることを知らないのかしら、とむしゃくしゃして仕方がない。太郎の口うるささは一種の逃げなのだ。本当に事故つたとき、「オレは充分注意したはずだ」と言い逃れたいのだ、きっと。

かくして、百子の一日は不愉快のままに過ぎていく。

もつと大変なのが、夫を駅まで送つていくときだ。隣に座つて黙つていたことがない。

「アクセルの踏み方が悪い」

「スピードを出しすぎだ。どうしてそんなに早く走る。スピードメーターを見ているのか」

「交差点はゆっくり入つて、サツとでる」

「ウインカーの出し方が遅い」

挙句の果てに、「いつまで経つても運転が下手だ。勉強が足りん」

「ま、気をつけて帰れよ」

夫を下ろした百子は深く溜め息を付く。気持ち重い。胃もしくしく痛い。そんなに文句があるなら、私のクルマに乗らないでよ。

百子は長年ゴールド免許証保持者だった。太郎がシートベルト不着用で減点を喰らつて、ゴールドでなくなったときは、「模範運転者がねえ」とからかつてやった。

ところが、魔の一瞬というものはあるもので、百子は自転車と接触してしまつたのだ。もう五年位前のことだが、お蔭でゴールドが無くなつてしまつた。以後、夫のうるさい指摘に反論できないでいる。

それにしても、太郎の運転には感心する。制限速度を守る。信号はきつちり守る。交差点を黄色で突っ込んだりしない。駐車違反しない。真に模範運転者である。太郎と出かけた孫が「お爺さんのクルマに乗っていると、酔いそう」と言つた。

定年退職した夫というものは家で飲み食ひすることが多くなる。三食ばかりか、おやつまでいるようになるのだ。そうした日常を楽しいものにしようと思ふと百子は考える。紅茶の一杯でもイギリス風に優雅にと。

然るにだ。太郎はテーブルに座るより先にテレビのスイッチを入れる。それはいい。買ったばかりのデジタルテレビでハイビジョンが観られるようになった。風景でも音楽

でも楽しめれば百子に文句はない。ところがだ。太郎の観るのは国会中継。社会問題。環境問題。教育問題。すべてNHK。そして百子に向かつて自分の意見を喋り捲る。テレビのご意見はほとんど聞いていないのだ。太郎の話は、それはそれで正當なのではあるが、百子は優雅にお茶を飲みたい。食事をしたい。日本国の政治も世界情勢も大事だと思ふけれど、せめてご飯くらい呑気に食べたいではないか。お茶くらい優雅に飲みたいではないか。

太郎はスポーツ観戦も楽しまない男である。野球もサッカーもそれほど興味が無い。観戦しだすと文句ばかり言い出す。

「へたくそだ。それでもプロか。真面目にやっておらん」

百子は、それは自分がスポーツをやらないせいだと考える。百子はテニスをやる。もう何十年とやってきた。それだけに難しさばかりでなく、人間のその日の調子、運不運が影響すると思うから、その場面だけ観て結論を言いたくはない。野球やサッカーでの批判はまだ聞いていられるが、テニスを観戦している横で、「そんなミスをするか？ プロだろうが」だの、「真面目にやっていない」だのとうるさく言い出すと、百子は黙っていられなくなる。

「ボールの回転もスピードもテレビでは分かりずらいでしようが。黙ってみてなさい」

皆、一所懸命にやっていると考えた方が楽しいではない

か。相撲の八百長問題でも、ほじくるよりも楽しんだ方が得だと考えるのが百子だ。胡散臭いことは世の中にゴマンとあるだろう。どんなことにも裏表はあるのだ。いい面を観て楽しめばいいではないか。

物事に真剣に取り組み、決めたことは我慢してでも実行する太郎から見ると、世の中の多くの現象が歯がゆく見えるのだろう。見えない相手に文句がある。腹立ちをぶつける相手にされる百子はかなわないのだ。それでも百子は太郎の言っていることはほぼ正論だと思っている。正しいご意見なのだ。自民党政治の腐敗についてもその通りだと思ふし、今回の二兆円ばら撒きの経済対策など選挙対策に過ぎないと同意見なのだ。ただ、家の中ではやめようよと提案する。

娘婿たちが飲みに来てくれたときも、待ち構えたように政治、経済の話をする。現役で、日常的にしんどい仕事をしている婿さんたちはもつと楽しく飲みたいはずだ。

「今日は難しい話はなしにしてね」と釘を刺そうとすると、「なら、いつそうした話が出来るといのか」とこ機嫌が悪くなる。

百子も決しておふざけ話が好きなのではない。テレビのバラエティー番組で繰り広げられるいい加減なお喋りにはうんざりする。延々とこういう番組が続くとしたら、日本という国は滅びるとさえ感じるのだ。かといって、いいも

のは、テレビはNHK、新聞は朝日、聴く音楽はクラシック、と決められてしまうと、反発したくなるのだ。

ある日、百子はNHKにしては軽い愉快な番組を観ていた。リビングに入ってきた太郎は、テレビ画面を見るなり、「民放を観てるのか?」と言った。

「いえいえ、NHKですよ」と言う。

「NHKも民放並になつてきたか」と不機嫌な顔をして出て行つた。NHKだけを是とする考え方にも限界がきたねと、百子はほくそえむ。テレビでも新聞でも良いか悪いかは内容で判断しないとね。

太郎の嫌いなものにマンガがある。マンガは本ではないと言ひ切る。百子もマンガには抵抗があつた。読むときは普通の本を読む以上に時間がかかる。描かれている絵の細部が気になるからだ。なぜ読むか。いい物がときどきあるからだ。

「火の鳥」も「アドルフに告ぐ」も駄目と言ひ切るの?

「日垂るの墓」は? 日本が世界に発信するアニメだつて、いいものはあるよ。「千と千尋の神隠し」なんかすごい人間世界を描いていると思うけど。

「いい物はあるだろう。けどな、子どもはまず基本を外しては駄目なのだ。古いものをちゃんと読む。国語力をちゃんと付ける。その上でマンガを読もうがアニメを観ようが

いいのだ。なのに世の中全体にふざけすぎだよ。漫才もいいよ。お笑いも結構だ。でもそうした連中がテレビの中でいかにも物知り顔でふざけていちゃ、子どもはどうやって真面目に物事と対処することを学ぶのかねえ。おれは疑問だね」

百子は今日も頭が痛い。頭痛というのではない。肩が重いのだ。正論に満ち溢れた家の中で、息苦しくなる。

「テニスに行つてきます」

「準備体操をしつかりやってからやれよ。車でコートまで行つて、いきなりラケットを振るのがテニスじゃないよ」

「わかりました……」

夫の正論を背中に受けながら、テニスコートに向かう百子の胸の内は複雑だ。どうして「楽しんでこいよ」の一言が言えないのだろう。

コートサイドで友人と話していると、どこの亭主も似たり寄つたりのようだ。女房を自分の持ち物だと考えるところからこうした過保護的発想が生まれるのだ。家庭内生活力という点では女房の方が上手であるだけに、余計に自分の考えを押しつけるのだろう。

百子はすべてにアバウトである。それは「いい加減」を心得ているということだ。暮らしのツボを心得ているとい

うことでもある。

百子は太郎が定年退職になったとき、話し合つて、昼食は各自、自分で作るように決めた。大学で化学を専攻した太郎は、洗浄が得意だし、料理にも興味があるようで快く承諾してくれた。以後、太郎は昼食を自分で作る。材料もスーパーに行つて調達してくる。その自立振りは友人も羨ましがらるほどだ。

太郎はきつねうどんを作る。三〇〇CCの湯を沸かし、味噌油を大匙一杯半、みりんを大匙一杯……といった具合にきつちりしたものだ。それが何年経つても同じである。いつもきつちり計つて料理する。見上げたものというか、融通が聞かないというか。

百子の料理はアバウトである。味付けも計量スプーンなど使わない。ある程度の材料があれば、いろいろアレンジして、その都度変わったものも作る。料理番組も料理本も参考にはするが、その通り作るうなど考えない。ぱっぱっぱつと早いのが取り柄である。従つて、同じものをもう一度作ることは難しい。

太郎はそれでは人には教えられないと言ふ。同じものもいつも出来ることが大事だと言ふ。

百子は、料理の先生ではあるまいし、その日の気分ですく料理する方が好きだ。特に自分の食べたいものは情熱を持って料理する。これは作る側の特権だね。

太郎の母親も口うるさい人だった。加齢と共に少し認知症気味になったころ、その私の強さに閉口した。実の子でもある太郎も悩んで医師に相談したとき、医師は、

「六十歳を過ぎれば、人の性格は変えられませんよ。加齢と共に、頭の中の箱がはずれるというか、いままです理性で押さえてきたことも、みんな表に出てきます。地が出てくる。若い方が我慢せん」と

百子はこの言葉を急に思い出して身震いした。太郎七十歳。

百子はよく胃が痛くなる。絶対、ストレス性胃炎だ。結婚するとき、百子は太郎と一緒になら「もも太郎」となつて、世の鬼退治にはもつてこいだと嬉しかった。あれから四十五年、仲良く鬼を退治し、幸せに生きては来た。世の荒波に流されることなく、路頭に迷うことなく暮せてきたのも太郎のお蔭だ、と思う。感謝する。それでいて、時折り溜息が出る。しんどい心持ちではある。

ストレス解消法はないものだろうか。

百子は思い出した。先日の喧嘩だ。

百子はクルマで出掛けたついでに近場のショッピングモールへ寄つたのだ。

ここの駐車場は五階にあつて、一気に坂を上るタイプだ。

大変な急坂で、運転に自信の無い百子は苦手である。坂の途中で止まる羽目になると、次の発信が怖い。

そもそも百子は海外で運転免許を取得したので、オートマ車しか運転できない。両足を使う運転が出来ないのだ。それでも平日は空いているので、一気に上れる。

「今日、モールに寄ってきたわ」と言うところ、

「あの坂、いつも嫌がるじゃないか」

「土、日は無理。でも平日は空いてるから一気に上がれるもの」

「だいたいな、坂道発進を勉強せんから駄目なのだ。真面目に運転するもんは、それくらいやるものだ」

太郎の説教が始まった。

「オートマ車はさつとペダルを切り替えると大丈夫よ。そういう風に出来てるよ」

「でも、坂道の途中で止まると怖いんだろ」

「そうだけど、両足使う方がもっと怖いわ」

「そういういい加減なやつは運転する資格はないね。真面目にやれよ。勉強しろよ」

「ああ、うるさい！ 不真面目で勉強嫌いで、世界一駄目人間を嫁さんにしたのは誰よ。人を見る目がないね。一生の不覚だね」

「……」

太郎をやり込めるのはこの手だ。

百子は思う。私ももうすぐ七十歳。性格を変えるのは至難の技だよ。それよりお互いの欠点を認め合って、底いあって、「もも太郎」で行こうよ。そう考えることからして、アバウト人間なのだろうけれど、毎日が不愉快で、イライラしながら生きていると、癌になるよ。先に死ぬよ。

百子は、太郎と穏やかに老後を過ごしたい。金婚式まであと五年だし……。

楽天女房と拘り亭主

太郎、七十三歳。女房と子どもの三人の一家をずっと支えてきた。おまけに実家では長男である。父親に死なれた後、実家をも支えてきたといえる。なにしろ妹はいかず後家だ。

太郎は大学を卒業して、化学会社に就職して以来、会社人間として実に真面目に働いてきた。技術力と語学力を買われて、ヨーロッパ初代駐在員としてドイツに赴任し、社の製品のシェア開拓に貢献してもきた。確かに仕事の出来る男であった。

女房の百子は、若い頃は留守勝ちな夫に寂しさが募りもしたが、だんだんいいが当たり前になり、家庭をひとり

で切り盛りすることに慣れて、自分の生活圈を確立していった。姑を見送り、子育てからも解放されてくると、趣味を始め、ボランティアに精出して、家にジッと居ることが少なくなった。太郎が定年を迎えたときはそういう状態の家であった。

太郎は今日も思う。

「オレは女房をずっと外では『家内』と呼び、しつかり家を守る存在だと思ってきたよ。ところが、定年退職して家に落ち着いてみると、女房のヤツ、殆ど家にはいないではないか」

「エッセー教室に行つてきまゝす」

「絵の教室に行つてきまゝす」

「ボランティアでYWCAに行つてくる」

「テニスに行つてくる」

「Aさんとバーゲンに行つてきまゝす」

「Bさんと美術館へ行つてくるわ」

「Cさんと映画を観てから食事します」

「Dさんとコンサートなの。ピアノのランランよ」

百子は毎日のようにいそいそと出掛けるではないか。

「これではオレの方が『家内』で、女房は『家外』だね」

太郎は定年になって、毎日、家にいるようになったとき、何か役割を果たさないと、家の中で居場所が作れないと思

つて、食事の後片付け、つまり皿洗いをすると宣言した。大学で化学を専攻したので、洗淨はお手の物である。自信がある。

百子は「そうお？」と特別嬉しそうでもなく、さりとて反対するでもなく、「好きにしたら」と放任した。大して役には立たないと踏んでいたのかもしれない。それより百子は、昼食の自立を申し立てた。昼食はそれぞれ自分で作って食べるというのだ。思うにこれは百子が安心して出かけられる仕掛けであった。

それにしても、台所に立つてみて、太郎は驚いた。なんと煩雑で整理が出来ていないことか！これでよく料理が出来ていることよ！これが会社だったら、上役からこつびどく嫌味を言われるだろう。家庭の主婦たるもののいい加減さには心底呆れたね。

太郎の家には孫が始終やつてくる。近くに住む次女が仕事人間で、子どもが出来ても働くことを辞めないで、その子が赤ん坊のときから出入りしているのだ。もう学童になったが、相変わらず夕方から母親を迎えに来る九時ころまでわが家にいる。

太郎の夕食は長い。酒好きときているから、ゆつくり飲んで楽しむからだ。孫はさつさと食べて、「おばあちゃん、遊ぼうよ」と待っている。「おじいちゃん遊ぼうよ」と決

して言わないのは、太郎の人気の無さだ。孫の顔を見ると、「真面目にお利口にやってるか？」と聞くものだから、わが家の孫は皆、ばあちゃん派だ。

おじいちゃんの食事が終わると、待ち構えていた孫と百子は遊ぶ。おじいちゃんは皿洗いだ。ときどき百子が気の毒がつて、

「おじいちゃんはいいねえ。お皿洗うの上手だねえ」とフオローすると、

「僕のお父さんも上手だよ」と言う。

ああ、孫の時代は男女共同参画だ。

台所で太郎はよくぶつぶつ独り言を言う。

「このごちやごちや振りは何としたことだ！ 洗剤のそばに野菜をおくな。この残り物はなんだ？ そのままにしておくのか？」

きつちり屋の太郎は皿や茶碗の数を数えて洗っている。人数分を計算して、不明な皿があると、

「百子、これは何に使ったんだ？」

「この鍋はもう洗つてあるのか？」

「この大皿はどこにしまうのだ？」

「フライパンは洗つていいのか？」

ひっきりなしに問いただす。

「洗えるものだけ洗つておいてよ。後は私がやるから」

「ちゃんとやつてくれれば済むことだろうが」

「たんびたんび、聞かれるとねえ……」

太郎は百子の提案通り、昼食を自分で作り出した。料理を始めた当座、鍋はここ、出汁はここ、塩、醤油、味噌はここ、うどんはここ、どんぶりはここ、と詳細に百子から台所の配置を教えられた。太郎には細かいことを覚えるという気が無い。その場になつて探す。それでいて、探し物は人の苦手である。いつも無い、無い、無い。

太郎はネギを探す。冷蔵庫を開ける。目の前にあつても目に入らない。

「冷蔵庫の中をもつと整理しろよ。なんでこんなにごちやごちやなんだ？」

「百子はもう少し整理の出来る人間だと思つていたよ。それがどうだ。家中散らかして、適当に戸棚に入れ込んで、何が何だか分かつたものではない。これで大学で生活理学を学んだと言えるか？ 自分だけ分かつている状態では駄目なのだ。皆が苦労しないでも分かるように整理してこそ、学問も生きるというものだ。これだから社会に出て働いていないヤツは駄目なのだ。一日中家にいて何をやって暮してきたんかねえ」

「そういつても、家の中は流動的なんよ。娘が嫁に行く。孫が生まれる。なんやかやと忙しくて、つもり積もつて今があるんじゃないの。きつちりきつちりやつていたら、堅

苦しい家は嫌いだと誰も来なくなるわ。なんとなく動いている家の方が気楽というものよ」

百子は言い返す。

台所での太郎の苦言はやまない。いつまでたつても改善されないからだ。百子は逆に機嫌よく皿洗ひしている横で、「そんなに洗剤使つて、あなたは環境問題にうるさいのじやなかったの？」とか、

「なにもかもいっしょくたに洗ひ桶につけたりするからよ。お湯の無駄遣ひも馬鹿にならないんだから」

とか、まるで姑根性で太郎を非難する。

「つべこべ言うな。洗淨のブロに失礼というものだ。適量の湯と適量の洗剤をちゃんと使わないと、きれいに洗えないのだよ。いい加減な百子とは違うんだからな」

「それにしても、百子のヤツ、最近感じているはずだ。台所に男が入ることのデメリットは大きいと。『男子、厨房に入らず』とした先人の知恵は大したものだと」

太郎が台所に入りますようになって、台所が余計に煩雑になつたし、整理がつかなくなつてきた。台所は唯一、女の砦だつたのかもしれないのだ。

太郎はときに心配になる。家計は大丈夫なのだろうか。

太郎は結婚以来、給料を女房に全額渡してきた。そこから小遣いを貰うのだ。化学会社は月給が低かつた。「これだ

けでやってくれ」というためには、全額渡しの方がさつぱりしていたのだ。だんだん余裕が出てきた頃からは、折りに触れ、「貯金しろよ」とは言つてきた。ときにはチェックもしたが、まかせつきりに近い。百子がたいして贅沢をしないことも分かつている。

ところがだ。女というものはどうも孫に甘い。孫のためには惜しげもなく金を使う。孫が小さいときはいい。高校生にもなると欲しいものの値段も馬鹿にならないはずだ。日頃、節約をモットーとしてゐるのに、東京から孫がやってくる、百子はいそいそと連れ出して、欲しいものを買ひやんじやん買つてやるのだ。今時の高校生、中学生はお洒落というか、結構着るものを欲しがらしい。百子のサイフは開きつばなしだ。

去年の暮れにも、掃除を手伝つてもらつたからという言い訳をして、孫四人をデパートへ連れて行つた。買い物をして、レストランで馳走して、意気揚々と帰つてきた。百子のサイフは空っぽのはずだ。高校生の孫は、スマツプの中井君が被つてゐるようなソフト帽まで買つてもらつてゐた。あんな帽子を被つてどこへ行く気だね。買つてやる百子にもあきれ果てる。後でやつてきた母親が、

「私が買つてやらない物を全部買つてもらつたのね、まったく」と苦笑いしていた。

百子は「ばあちゃんに甘くてもいい」という考えのよう

だ。孫を教育するなど、端から考えない。「躰けは親の責任だね。氣に入らなけりや連れてくるな」の勢いである。四人とも外孫だからなんとか平和を保っているが、息子に子が出来たら、これはやつかいだぞ。嫁さんと戦争だね。

太郎は常々言っているのだ。

「孫の機嫌を取るな、つて。いい格好するな、つて。オレ達の年金だつていつまで貰えるか。日本国は財政的に破綻寸前だということが分かっているのか？ おまけに昨今、後期高齢者医療制度とかぬかして、年金からいろいろ差引きくというではないか。昨年から金融危機で企業もアツブアツブだ。いつ倒産するか分からない。そうしたら僅かにしろ下りている企業年金も無くなるんだぞ。呑気に孫の機嫌なんぞ取ってる場合かよ」

そんなある日、百子は嬉しそうに買い物から帰ってきた。どうやらバーゲンで何か買ってきたらしい。

「ほら、あなたのセーター、いい色でしょう？」

「また、買ってきたんか。オレの物は何にも買うなつて言つたろ」

「だって、出かける度に、『何、着て行こうか』と悩んでばかりじゃないの」

「買う前に、持つてる物を確認せんと訳が分からんようになるぞ」

「年寄り身奇麗にしていなと、嫌われるよ。新しいものの一つや二つ買つて、老後を楽しく暮らさなきゃ」

「老後には金が大事なんだよ。分からんやつだ」

太郎は確かに始末屋だ。物を大事にする。ゴルフの道具も大事に大事に何年も使つてきた。ゴルフバッグもそうだ。一つあればいい。

「世の中には中身はないのに外側だけ立派に飾っているヤツがいるものだ。持ち物で勝負しようとする。また、持ち物で人を判断する馬鹿もいるんだね。ゴルフ場に乗り入れるのに、ベンツに乗っていたら偉いか？ ベンツなどドイッに行つてみる、タクシーだつてベンツだよ。ヤーさんじやあるまいし、サラリーマンがベンツになぞ乗るなつて。国産で充分だよ。この点、オレは愛国者だ」

「ベンツになぞ乗らなくたっていいよ。でもね、私は老紳士はダンディーであつて欲しい。むさくるしい年寄りは老害に等しい。出来るだけ背筋を伸ばして、コギレイに颯爽としていて欲しい」

「そうして、もてたらどうするね」

「結構じゃないの。デートでもしたら」

部屋を出て行く百子の背中を見ながら、太郎は思う。

「百子のヤツ、あんなこと言つてるけど、本当にオレにガールフレンドが出来たら、角出すぞ。『老後の面倒、見て貰つてね』なんて言いかねない。百子の畏にかかつてたまる

か。気をつけないと。それにしてもこのセーターはいい色だ。ゲーテのドイツ語教室の日にも着て行こうかな」

太郎は若い日にドイツで働いて以来、ドイツ最良である。ドイツ大好き人間。海外旅行ならドイツ！という訳で、定年後も何度ドイツに行ってきたことか。定年を迎える頃、ドイツ語をもっと勉強したくて、ドイツが外国人向けにやっている語学教室、ゲーテ・インスティテュートに通いだした。もう十年以上になる。最近は少し耳が遠くなって、不自由もあるが、辞めずに通っている。教師のドイツ人との付き合いも深く、教師がドイツに帰国した後もメール交換などして、ドイツに行くと、待ち合わせて会ったりする。ドイツに行つて、ドイツ語の世界に浸つているときが、いちばん幸せを感じるときだ。

一昨年のことだ。大学の友人達がドイツを案内せよというので、夫婦連れで行つたときのことだが、ホテルでトラブルがあった。ベルリンの新興の大ホテルだったのだが、観光から帰つてみると、私達の部屋に他人の荷物が入つていた。別の日には、私達の荷物が片付けられ、放り出されていた。干してあつた洗濯物は濡れたままスーツケースの衣類の中に入れ込まれ、メチャクチャになっていた。友人達と別れて延泊していることが、フロントでチェックされ

ていたはずなのに、フロアーとの連携が悪かつたのだろう。太郎はこういうミスが大嫌いだ。おまけにフロントは、「何か無くなつたか？」と聞いて、紛失物がなければ問題ないと高飛車だった。怒つた太郎は帰国後に得意のドイツ語で、ホテルの不手際とその対応の悪さについて、意見書を送りつけた。後日、ホテルマネジャーから謝罪の手紙が舞い込み、おまけにもう一度ゆっくり泊まっていた。さういふと、スイートルームの宿泊券二泊分を同封してきた。

さあ、このご招待を受けるには、高額の飛行機代がいる。どうしたものか。

太郎は百子を連れて、わざわざ泊まりに行つたのだ。ヨーロッパのホテルのスイートルームに泊まる経験も悪くないと思つたのだ。

ベルリンの空港に着くと、ホテルの運転手がベンツで迎えに来てくれていた。ゆつたりした高級車。お飲み物付き。ベンツにも格差がある。これは相当な高級車だ。ソファアの座り心地は最高だ。ところが横の百子は落ち着きなく座席の端にちょこつと座つてゐる。

案内されたスイートルームは別館の九階にあつた。廊下も広く、敷き詰められた絨毯はふかふかで、セキユリティーも万全のようだ。中に入ると、大きなリビング。グルツと置かれたソファアには十人以上は座れる。大きなテーブ

ル。テレビ。サイドテーブルには飲み物セットと大盛りの果物。真っ白なナブキンの乗った皿。ナイフとフォーク。玄関脇のデスクにはパソコンの端末まであって、ビジネスが出来るようになっている。

「わあ、すごいなあ。この果物、食べてもいいのかしら」

「ボトルの水はスウェーデン製よ。飲んでもいいの？」

百子は興奮気味だ。

真ん中は生活エリアで、更衣室、ミニキッチン、トイレ、大きなバスタブ。そして奥に寝室があった。大きなベッドが二つ。サイドテーブルにテレビ。豪勢である。

すごいすごいとはしゃいでいた百子がだんだん大人しくなつて、うろろろ落ち着きなく歩き回っている。

「お茶でも淹れて、果物でも食べようか？」

「ウンと高くお金を請求されるのじゃないの？」

「そのときはそのときだよ。ピクピクするなつて」

廊下を歩くときも、エレベーターに乗っているときも、

百子は落ち着きを失くしていた。場違いなところにいると感じているのだろう。太郎は社用で何度も海外出張をしてきた。社長のお供で豪勢なホテルに泊まりもした。これ位のことには驚いたりしないよ。でも、女房というヤツは可哀想と言えはいえる。家の中ではかり生きてきたのだからなあ。百子にいい経験をさせてやろうと思つたんだが、あんまり嬉しそうでないね。

ホテルは太郎の意見にいたく感動して、こんなサービスをしてくれたのだ。太郎は接客ばかりでなく、ホテル経営の基本姿勢まで、意見を述べたのだから。今後、このホテルは良くなつていくはずだ。

夫婦で長年暮してきても、経験値が違ってくるから考え方も違ってくるんだなあ。今回のドイツでのアクシデントでも、百子はもういいじゃないの、と被つた迷惑を我慢しようとした。そうじゃないんだ。なにもいいちゃんをつけているのじゃないのだ。

物事をいい加減にしない、それが太郎のモットーだ。人間は放つておくと低きに流れる。楽な方、楽な方へと行つてしまふのだ。何でも拘つて、これでいいのかと考えて行動しないと、何にも身に付かないものだ。百子にもいろいろアドバイスしてやつたが、変わらないね。ポツポツ諦めるしかないか？ ま、女房の機嫌がいい方が家の中、丸く収まるようだし、張り切つてよく働いてくれるしね。

昨年暮れの「年賀状欠礼」のハガキに、親や本人に混じつて、妻が、というのも何枚かあった。本人が亡くなるよりショックだね。この歳になつて、女房に先立たれるのは寂しかろうよ。ずけずけものが言える相手は女房だけだもんなあ。金婚式まであと五年。「もも太郎」になつて、仲良く暮すか。

九十度の関係

百子は友人とときどき小旅行をする。一泊二日、二泊三日で、温泉に行ったり、高原に行ったりするのだ。それは夫との旅行やきょうだいとの旅行と違って、百子を非常に解放させるものである。夫やきょうだいの愚痴を言い合えるというメリットがあるからだ。

昨年も友人三人で白馬村へ行った。白馬には、もう随分前に亡くなつてしまつた同窓の友人のお母様が避暑をされているのだ。ご高齢で、毎年、夏をそこで過ごされている。「よかつたら、あなたたちもいらつしやい」と呼んでくださった。

大学時代を共に過ごした私達は喋りだすと止まらないほどに何でも言い合う。体調を少し崩されたお母様を見舞つた後は、部屋であくなくお喋りに興じた。

話題の一つはやはり夫への愚痴である。定年を迎え、七十歳を越えた夫という種族がどんなものか、お互いに日頃のストレスを発散すべく喋り捲つた。そんな中で律子さんが「食卓に座る位置関係は九十度がいい」と言いはじめた。

どこかの話にあつたという。

「う！ 九十度？」

「つまりね、向かい合わせでなく、食卓の角を挟んで座る

こと。ホラ、真正面だと見えすぎる顔が半分になるのよ」「なるほどねえ。うちはそうだよ」

百子が応じると、もう一人の友は、

「うちは正面だわ。百八十度」

「だと、うつとうしくない？」

「確かに。雰囲気悪いときはお互いに下ばかり見て食事してるかなあ」

九十度。わが家その位置関係を保ちだしたのはいつ頃からだろうか？ 新婚時代は対面で座っていた。食卓も小さいものだった。食事の時間にテレビをつけていたかどうか、とにかくお互いの顔を見ながら食べていた。

子どもが生まれて小さい間は、子が私の近くにいて、いちばん遠い正面に、やはり太郎が座っていた。それならいつから？ そうだ。食卓を大きなものに買い換えたときからだろう。子ども達も大きくなり、私から離れて正面に座るようになったのだ。太郎は百子の右隣、といつても九十度の角度を作る位置に座ることになった。

食卓の位置関係をテレビドラマで観察していると、なかなか面白い。父親が家長然と長い食卓の一角に座つて、全体を見渡している場合や、そこは年寄りが座つて、父親は次席というか九十度を保つて控えていたりする。主婦の席は必ずから台所にいちばん近い場所だ。核家族だと一生そ

の場所、昇格することはない。

律子さんの話は、子も巢立ってしまった後の老夫婦の問題である。九十度が理想だという。つまり、場合によって、顔を見ないですむ位置だ。

わが家に限って言えば、食事の時間は往々にしてテレビをつけている。食事時間に聞かないでもいい不愉快なニュースを聞くに、夫は意見を言いはじめめる。

「麻生総理も駄目だね。はやく国民の信を問うべきじゃないのか」

「小沢も馬鹿だ。なんであんな人物を秘書に使うのかねえ」
「教育を悪くしたのは母親だね。女がのさばってしまうとロクナコトがない」

ああ、私の作った煮物は美味しくないの？今日の鰯は活きがいいじゃない？ 百子はちらつと太郎の顔を見る。その目はテレビに釘付けだ。「うるさい！」と言えば、余計に不愉快になるだろう。左の耳でテレビの話を聞いて、右の耳で太郎の話を聞く。そうしながら百子は器用に明日のことを考える。「明日、お天気ならテニスをしよう」と

対面で食事をしていたら、こうはいかないだろう。面と向かって政治討論会？ カンペンして欲しい。九十度はかわしの角度だ。聞いているようで聞かないですむ。ときどき太郎の横顔を伺い、ご機嫌の程も測れる。

そんなある日、百子はテニスコートでこの話題を提供した。八十歳に近い良子さんは、「うちは並んで食べてるのよ」と言った。九十度でもなく百八十度でもなく、角度をなさない位置関係。

「どうしてってね、お父さんが食べ物をこぼして仕方がないから」

良子さんのご主人はすでに八十の坂を越えて二、三年になる。マンションで二人暮らしだ。「おとうさん、しっかりしてつてよく言うのだけど、お汁がたらたら口から流れるので、エプロンも付けて貰っているのよ」

良子さんは食事の間中、ご主人の世話が絶えないと言うのだ。几帳面な性格だから余計に気になるのかもしれないが、老人はえてしてそうなるものでもある。初めて聞く彼女の苦労話だった。九十度がどうのと言っていられるのも今しばらくのことで、近々わが家もそういつたときを迎えるのだ。

良子さんは高齢になったご主人がなにかと頼ってくるのでしんどいとも言っていた。

「病院にもついて来て欲しそうにするのだけど、頑張つて一人で行つてもらっているの。手を出すと、どどつと甘えられそうで怖いよ」

私より十年近く先を行く良子さんの話は身につまされる。そうかあ、つと。

「でもね。お父さんには生きてて欲しいの。いちばんの話し相手なもの」

この一言は重い。

夫の愚痴を話すとき、すでに夫を亡くしたきようだいや友人は決まって自分達の孤独を語り、贅沢な悩みとしか受け取らない。ついこの間まで夫をこき下ろしていたとしても、死なれると途端に恋しい人になるのだ。

「喧嘩相手がいて、あなたは幸せね」と皮肉られたりする。良子さんは言う。

「私も歳を取ったのよって、ときどきお父さんに言うのだけれどね」

高齢化していく夫婦の先にあるのは老老介護である。そしてその負担は多くの場合妻にかかる。良子さんのような友人は貴重な存在だ。テニスのグループで最高齢の良子さん。ご主人の病院へついで行かないで、テニスをしている。それでいいのだ。彼女の生活の原動力は、テニスをする。とてもやややを発散し、体力をつけているところから生まれているのだろう。

百子には友人知人が多い。いろんなところでいろんな話を聞く。食卓の位置関係にアンテナを張っていると、こんな話も聞いた。

「夫はね、一人がいいらしいの。お盆に自分の分を載せて、

自分の部屋で一人で食べるのよ」

別の知人も

「亭主と一緒に食事をしたのはいつのことかしら？ 亭主は自分の部屋で好きなテレビを観ながら一人で食べてるわ」

「あなたは？」

「私？ 台所で一人で食べてます」

熟年夫婦で、寝室は別々という話はよく聞くが、食事も別々とは恐れ入る。九十度の話どころではない。それでいて離婚もしなくて、同じ屋根の下で暮しているのだから夫婦というものは奇怪でもある。

百子は太郎とこれから何年か何十年か生きていく。「もも太郎」よろしく、お互いに妥協し合って、穏やかに暮らしていきたい。九十度の関係を少しでも長く保ちたい。そのためにはと百子は考える。

「嫌がらずに太郎の話をもう少し聞いてみようかしら」

夕食の食卓を整えながら、百子は、もしかしたら、いまが幸せなときなのではないかと思おうとした。

「あなた、ごはんですよ」

やおら書斎から出てきた太郎は座るなり言った。

「自衛隊がソマリヤ沖へ派遣されるつてのには、賛成できないね」

「……」

編集後記

ある本でこんな文章に出会った。

「喪失感などという抽象語を古人はもたない。しかしそれが古代人の強みでもある。なんとか具体的な言葉によって、それを表現しようとする」

ひるがえって我々は、安易に抽象語を使いすぎるようである。便利で、意味広く、的確に表現しようとするしんどさを省いてくれ、したがって、ときに内容空疎で何も物語っていない。

日常会話ならそれでよいが（その方がよい時もある）文章ではそうはいかない。

ときに象徴とか寓意の助けもあり、なんとか具体で表現しようとし、面倒になって観念、抽象に逃げる。私はそんなことのくり返しである。

鳥語の諸兄姉も、何を書くかどうか描くかに心を勞しておられるに違いない。

そう思うとき、同志愛に近い感情を感じる。水っぽい稀薄なものであるが、種類としてはそのような感情である。

本号は、詩三編、小説三編、エッセイ二編の、御覧のような内容になった。（東築史樹）

鳥語 第五十八号 定価 四〇〇円

二〇〇九年四月十五日 発行

編集・東築史樹
発行・中尾哲也

鳥語社

発行所 639-1039 大和郡山市椎木町十一の四



④ 会費・同人費の納入、その他すべての送金は、左記あてにお願いします。できるだけ郵便振替を御利用下さい。

送金先 617-0825 長岡京市一文橋二の八の四

振替口座番号 〇〇九三〇一九四四二九七
振替口座名 鳥語社会計係
山根玲子方

振替口座番号 〇〇九三〇一九四四二九七

〒639-1039 大和郡山市椎木町11-4

Telephone 0743-56-1846

Internet Protocol 0743-20-7474

Facsimile 0743-56-3841

E-mail address chogotn@agate.plala.or.jp

chogotn@hera.eonet.ne.jp